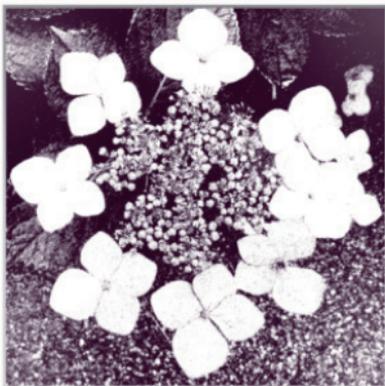


三二、七六八

日向 敏



32,768

I walked on the stepping stones.
Then I found hydrangeas. Their
flowers color were blue, but there
were no same blue.

三二、七六八

日向敏

32, 768
by
Bin HIMUKAI 2016

art direction
by
Bin Himukai
cover design
by
Matthew A. Keith
(t. m. production)

三三、七六八

刀を見るため、大社へ行く。気象情報によると、大社では昨夜から雨が降り続けているそう
うだ。今も小雨が降っている。

参道を横目に小道へ入り、速度を落とす。道路に面して家や商店が並ぶ。門から出て来た
人が、道を小走りで横切るのを待つ。石造りの門は、垣根と一体となっていた。駐車場を發
見する。助手席に立てかけられた傘をつかみ、車から降りる。小さな神社があり、庭がある。
庭は、すでに美術館の敷地の一部だ。

案内板を見て進む。靴に雨粒が落ち、そこだけ色が深くなる。変色した部分は、円形だっ
たり、崩れた楕円だったりする。今しがた浸みた所と、ほとんど変らない場所に雫が落ちる
こともある。

飛び石を踏んで歩く。紫陽花が咲いている。花の色はどれも青。濃淡の違いがある。萼の配置も、密度も、大きさも、株ごとに違っている。枝によっても異なる。八重がある。変わり紫陽花が多い。

そのなかに、見なれた、ごくふつうの額紫陽花がいる。私はカメラを取り出す。傘のせいで少し手間取る。傘は首と肩で固定する。紫陽花の花弁のように見える部分は萼だと聞いている。おしべやめしべは、ぎつしり、円形に集っている。その円の中心がファインダーの中央に来るように撮影する。円がゆがまないよう、カメラをかまえないおす。

円を取り囲む萼は四角形をしている。四角の萼が、角度を変えつつ一定の輪上に配置されている。円の周囲にあるのは四角形なのに、その四角もまた、円を構成する。

画面から萼があふれないように気をつける。もう一度シャッターを切る。

刀を見るため、瀬戸内へ行く。空の青さにおののく。

事務室には、向かい合わせの机がふたつ、主事用のやや広い机がひとつある。その奥は応接室ふうにしつらえてある。応接室部分と事務室の間を仕切っているのは、すりガラスをはめ込んだ木のスクリーンだ。隣の地区の公民館も、同じような作りになっていた。その事

務補佐員をしている江藤さんにそう言ったら、「主事、前はうちで館長されてたんです」と教えてくれた。江藤さんは私より歳下で、公民館や役場の人事に詳しい。隣の地区のほうが、事務室は広かった。

来客用のソファ近くには、キャビネットがある。キャビネットには花瓶が置かれ、花瓶には大きな紫陽花がさしてある。花、に見える部分は、私の手をめいっばい広げたよりも大きい。二輪もさしてある。給湯室のながしにも一輪、紫陽花がかざってある。こちらは、私の拳より小さい。紫陽花は、主事の家庭に植わっていたものだ。

私は給湯室にいる。水に浸かって茶色くなりかけた葉をちぎる。変色した葉は、膿んだようにふくらんでいる。水を吸っているのか。一昨日の新聞に挟まっていた広告紙で葉をくろみ、捨てる。花瓶の水を捨て、すぎ、水道水を入れる。紫陽花は青い。主事の家庭の土も酸性だ。

室町時代の刀は、きつさきが小さい。

隣に江戸時代中期の刀がある。こちらのきつさきは、室町時代のものよりも大きく、江戸時代末のものより小さい。

江戸時代中期の刀が同じ会場に展示されていなくても、室町時代の刀だけを見て、そのきつ

さきが「小さい」と気づくようになれるだろうか。

ペンをもったまま、デスクトップパソコンのモニターを三十度くらい回す。それで画面が見やすくなる。モニターに表示されている施設予約表を確認しつつ、来月上半期の予定をホワイトボードに書き込んでいく。

今日の予定が目に入る。二時から俳句の会。明日は料理教室。ニュースを思い出す。今日と明日は一日じゅう晴れ。調理室の西側出口は午後にかけて陽があたるので、和室1のそうじと、布巾の洗濯がしたい。

昼休み明け、一階の掃除道具入れから比較的新しい掃除機を和室1に持って上がる。畳の目にそって掃除機をかける。折り紙の端が吸い込まれていく。二等辺三角形の長辺がゆるやかに弧を描いていた、と見た。

四日前の金曜日、放課後クラブの子どもたちが七夕の飾りを作っていた。先ほど吸い込まれた折り紙と同じ紙でできた飾りは、きつと、竹にさげられている。先週、竹を玄関ホールに設置した。主事の友達が、軽トラックに竹をのせて公民館の玄関に乗りつけた。私はその日の夕方、玄関マットをそうじした。竹は、階段の手すりに縛りつけることで、なんとか安定した。

給湯室で雑巾をしぼってくる。膝をついて畳を拭く。縁と縁の間にはさまったビーズを見つめる。ビーズは透明で、細長い六角形をしている。すぐにズボンのポケットにしまう。

放課後クラブの責任者のようになっていた木元さんが、ビーズのペンダントを子どもたちと作っていたのは、六月頭のことだった。木元さんの隣で、すごい速さでトンボの形をしたものを作っている子がいた。他の子どもが最初の作品を完成させる間に、彼は三つもトンボを作り、四つ目にかかった。木元さんの手伝いをしていた私は、まだひとつも出来ていなかった。

彼の指の動きを感心して見ていたら、何がほしい、と聞かれた。オハグロトンボ、という名が口から出てきた。それと同時に、オハグロトンボは、初夏の川によくいる黒いトンボだと思ひ出した。藻にとまっているのを見かけたことがある。「ハグロカー」と彼はぼやき、透明で、伸縮性のある、細いてぐすにすごい速さで黒いビースを通してくれた。

「……ヨシヤンマのほうがカッコいいし」と彼が言う。私はトンボの名前をよく聞き取れないまま頷いた。

「そうだねえ。オハグロトンボはカッコいい系じゃないかもしれんね。やわらかく飛ばし、色も綺麗だけん」

「おれ、ヤンマが好き」

水拭きのあとは、からぶきをする。

刀が曇ってる。手入れして間近で見たい、と隣の人が言う。

「曇ってるの？ 古いやつは皆こういうものかと思ってた」

隣の人の、隣の人が言う。

花瓶を持って、給湯室に行こうとし、「くたびれたら、水切りすうとちよっこお元気になるけどね。まあ持って二日だけんな」主事に声をかけられる。主事からコーヒーの香りがする。主事が持つマグカップから、コーヒーの香りがする。

くたびれる、という表現が、頭のなかで繰り返される。紫陽花の萼と花の部分がうつむいてくると、自然、花瓶の口にもたれかかる。なるほど、疲れきった様子に見える。

手のひらほどの大きさの紫陽花は、もう何度も流水の中で茎を切りなおしている。昨日の午前中にも水切りをした。もともと置いてあった、来客用のキャビネットの上に戻すと、半日で紫陽花がぐったりしてしまふ。主事の机に置いておくと、夕方まで顔をあげている。主事の机の周りは、エアコンがよく効く。ただ、翌日出勤すると、紫陽花の葉は緑のまま、萼もしおれていないのに、ぜんたいが生彩を欠いて、弱っている。

「ただの庭花だけ、無理せんでいいよ。うちげの庭、えらいこと生えとるし」なんならまた切つて来ちゃあわあ。

私は、お願ひしますと笑つてみる。今日はまだ捨てない。花瓶は、主事の机の上に置く。

刀の見方を知っているか、と問われる。私はすぐに答えられない。答えを整理する間が生まれる。

姿を見て、地鉄じがねを見て、刃文を見て、最後に銘を見なさい、とおじさんが言う。刀の前で説明している。銘を先に見てしまうと、銘で刀を判断してしまうから、と言われる。私はそれを、どこかで読んだか聞いたかした情報と照合しながら聞く。知識と一致したことを黙つて喜ぶ。

赤羽刀の話が出る。私は、自分の知識を修正する。赤羽は、あかばね、と読む。なかごに書かれた数字を見る。数字は白っぽいペンキで書かれている。

おじさんは続けて、私の知識の外の話をする。私は、そこで語られる言葉を、うまく漢字に当てはめられない。覚えておくことができない。「上古刀」と、当てはめられそうな語が、次なる知識への鍵になっていた、との記憶が残る。しかし、その言葉は、絶対に「上古刀」という言葉ではなかった、との感覚も強くまとわりつく。帰りの車の中で、私はつかみそこ

ねたことを悔しがる。

昼休みに合わせて出勤すると、私の机の上に、拳大の紫陽花がささったコップが置かれている。給湯室にあったものを、わざわざ移動させたのか。キャビネットの上には、新しい紫陽花が生けてある。主事の机の上に花瓶はない。

「新しいの、持って来てくださって、ありがとうございます」

主事がパソコンから顔をあげた。

「わし？ や、わしじゃない。堀田さん家の」

「あっ」駐車場への入り口で堀田さんの運転するスバルとすれ違ったのに。「お礼、言わなくちやいけませんね」

「言っちゃいたけど、まあ、あんたも声かけたげといて。どうせ明日、文化祭の打ち合わせで来なあに」

そうします、と返して、私は机の上の紫陽花を指差す。

「こちらも、堀田さんが？」

「いや、それ、わしが。まだ咲いとるし」

「これだけずっと元気ですよねー」

「うん、うん。じゃ、昼メシ食って来うわ。一時半には戻るけん、よろしく」

「今日、行きしに見たんですけど、なんでしたっけ、平岡の焼きそばの店、空いている感じでしたよ」

「ええー、今日は作ってあるって家から連絡あったけんなー、また今度だわ」

主事はクランチバッグを置いたまま出て行く。そういえば、主事がこのバッグから何かを出したことがあっただろうか。去年の一月九日からこの公民館で働きたけれど、その日からこのかた、バッグの留め金が動くのを見た記憶が無い。

時計を見て、慌ててタイムカードを押す。印字を確かめ、安堵する。机に置かれた、ちつともくたびれていない紫陽花を見る。葉はいきいきとした緑色で、茎もぴんとまっすぐだ。全体的に小粒な萼が多く、開ききっていないものもある。鼻を近づけてみるが、匂いはしない。紫陽花のはいったコップを、机の左側に置いてみる。邪魔になりそうだ。持ち上げて、あたりを見渡す。机の左手にある受付窓に置くのはどうか。受付といっても、簡易なものだ。十センチメートルほどの幅の台が、事務室側と玄関側に向けて突き出している。事務室側の、私の机に面していない部分は何も置いていないが、うっすら埃がたまっている。玄関側にはペン立てがあり、様々な色やロゴのはいった不揃いなボールペンが入っているが、ときどき誰かが持ち出してなくなっている。そもそもこの受付窓を使う人は稀だ。用がある人は大抵、

直接事務室に入ってくる。

コップは事務室側の受付窓に奥。茎を回して、紫陽花のドームがふくらんでいる側を外に向ける。席に着く。私からは、花の内側がよく見える。傘にたとえるなら、骨のところ。紫陽花の緑の茎は太く、しっかり伸びている。そこから、細くて白っぽい茎がでている。それは、放射線状に広がって、萼や花を支えてくれる。周縁の萼が開いているのに対して、内側の萼はまだ閉じている。内側にある萼のほうが、周縁のものより成長しづらいという特徴でもあるのだろうか。それは、紫陽花に共通のものだろうか。額紫陽花を思い出す。主事のクランチバッグが目に入った。椅子の高さを調節する。パンフレットの原稿を入力し始める。

「トンボの図鑑、ですか。ここにはないんですよ。ポケット判の虫の図鑑ならあるんですけど。トンボだけが載っているのがいんですよ」

「そうですね。どうしてもなければ、せめて、珍しいトンボが載っているもので……」

「図書館には行かれましたか？」

「町立のには行っただけですけど、息子が、いいのが無いというので……いつもは小学校の図書室の先生がどうかしてくださるんですけど、夏休みですし」

「その図書館になくても、司書の方に言えば、他の図書館から取り寄せて下さると思います」

すよ」

「えっ、無料ですか？」

「たいてい無料だと思います……ちよつと、電話して聞いてみます。お時間、よろしいですか？」

和室の入り口で、なんとかヤンマが好きな彼は図鑑を開いている。さつきから全く身動きをしない。彼のいる場所では、体右半分は板間に、左半分は畳にかかることになる。座りにくくないのだろうか。図鑑に夢中で、そんなことを考えるどころではないのかもしれない。奥では、他の子どもたちがいくつかのグループに分かれて工作をしている。今日は人数が多い。ゲームをしている子もいる。彼は私が見ていることに気づいた。私は、声を潜めて話しかける。

「いいの、載っとる？」

「ん」これとか知らん、ひそひそ声が返ってくる。「天然記念物に指定されたの、小笠原にし
かおらん」

「小笠原諸島は遠いなあ」

「でも、見たことあるの、あるで。ここらへんのは、だいたい知っとる」

「すごいな。こんなんおるん」

「おるし！ 平岡で見たし」

「平岡まで、一人で？」ここから五キロは離れているのに。

「開通記念のときだけん、みんなで行ったに決まっとーがん。校区外だから、低学年は一人で行っちゃいけないの、知らんだ？」

校区外。久々に聞く単語だった。「そげか、知らんかった」平岡から岡山側に抜ける自動車専用道ができたときに催されたウォーキング大会のことか。

「お父さんとお母さんと一緒に行っただけか？」私が言い終わる前に

「……ヤンマは捕まえられんかった」と彼は残念そうに言った。また、トンボの名前を聞き取り損ねる。

「いけんかったね。珍しいの、写真に撮っとけたらよかったなあ」

「写真より、ほんもん飼いたい、大変だけど」

「じゃあいつか、特別天然記念物のやつとか、探しに行けたらいいねえ」

「はーああ？ まず、トンボに特別天然記念物おらんし！」

「コーキ！」

大きな声が見ると、前髪から右耳にかけて綺麗に編み込みをした髪の子が立ち上

がり、こちらに顔を向けている。

「コーキ、うっせえ！」また叫んだ。

コーキくん（という名前だったのか）は、口をつぐんだ。女の子が座ると、コーキくんも腰を浮かせて畳のほうに座り直し、凶鑑のページにじっと目を落とした。編み込みの子を注意したいという気持ちと、コーキくんも実際にうるさかった、という事実が私の中でせめぎあう。放課後クラブのひとつがあの子をなだめている。木元さんは動かない。コーキくん何かを言うのかと思っていたが、そんなことはない。

コーキくんは黙っている。あの女の子は、ときどきコーキくんを睨みつけるように見ている。私はここから離れたい気持ちになっていた。何か、事務室でやりのこした仕事はなかったか、と考えてしまう。放課後クラブのひとつは、あの子を叱ったのだろうか。コーキくんは、このクラブでどんな立場なのだろうか。すでに何回か同様の衝突があったのだろうか。木元さんがコーキくんをフォローしないなら、私が声をかけるべきだろう。私は、コーキくんになんと言った方がいいのか。コーキくんが、凶鑑のページを繰っていく。天然記念物のトンボ、とあるページを開き、順に指し示した。

「国指定だと、」コーキくんの声はかなり小さくなっていた。「ハナダカトンボ、シマアカネ、オガサワラトンボ、オガサワライトトンボが天然記念物」

放課後クラブの撤収の時間となる。コーキくんのおばあちゃんが迎えにくる。コーキくんは、おばあちゃんに向かって走って行き、追い越してしまう。私の顔は一度も見ない。

「たしかに、コーキくん、うるさかったね。だから、他の人のことも思って、注意してくれたのかな。ありがとう。でも、あなたの声も大きくて、私はびっくりした。だから、次からは、さっきの声の半分で注意してくれると嬉しいな。」

コーキくんも、次から、さっきの声の半分で喋ってみよう。トンボの話は楽しいし、私はもつと聞きたい。ついうっかり大きな声になってしまったこと、私もよくあるよ。楽しいと、どれくらいの声で喋っているか分からなくなるもんね。でも、私の前でそうなったら、教えるよ。」
タマネギをみじん切りにしながら、ようやく思いつく。同時に、ずいぶん幼稚な言い方じゃないか、と思う。

トマトのホール缶を開ける。ふたはキッチンペーパーでぬぐってから簡単に洗って、洗剤やスポンジを入れているラックにひっかけた。フライパンを加熱して、オリーブオイルをひく。タマネギを炒める。塩をぜんたいにかける。また炒め、口に出さずに喋ってみる。

「たしかに、コーキさんの声は大きすぎたと私も思います。だから、あなたが注意してくれたことは、間違っていない。ありがとう。でも、注意をするあなたの声も、かなり大きな

もので、私は驚きました。コーキさんはその声を聞いて、静かにしてくれました。でも、他の人だったら、声が大きすぎてあなたが何を注意しているか分からなくなるかもしれないし、聞きたくないと思うかもしれない。なので、次からは、さっきの声の半分の大きさに注意してくれるとより良い注意になると思います。

コーキさんは、人の言葉を聞いて、きちんと静かになったところがすごいです。次から話す時は、さきほどの声の半分の大きさに喋ってみるといいかもしれません。私も、ついっかり大きな声になってしまふことがあります。自分が話したいことだと、ますますそうなってしまうことが多いです。ただ、あなたのトンボの話は楽しいので、私はもっと聞きたいです」

そして私も、私の知っているトンボの話をしたい。

ポスターをA4に縮小して出力し、実際はA2にします、とメモをつける。パンフレットや回覧用の文書とともにバインダーにはさむ。主事に手渡そうとしたところで、スバルのエンジン音がする。堀田さんか。

「お茶、お願いしていいかいな」

私から回覧文書を受け取った主事に、そう言われる。「冷蔵庫に梅大福いれとるけん、それも出してごしない。あんたの分もあるけん、休憩すっただわ」

「ありがとうございます」主事が鼻頂にしている和菓子屋さんが季節の果物を入れて作る大福は、中に入るものによつて、求肥と白あんの厚みが変わる。

私はどの果実の大福も好きだが、特に梅大福が好みだ。大粒の梅の甘酸っぱさと、皮が入っていない白あんのほっくりした甘さを、薄めの求肥がまとめてくれる。はやく食べたい。給湯室に向かう。堀田さんが玄関で立ち止まり、よっ！ と手を挙げてくださる。

「主事はお中におられますよ」

「そつげなこと分かっちゃーわい！」

やかんに水を入れ、火にかける。戸棚から、大きくて四角いお盆を出してみる。漆塗りの地に露草が描かれている。絵に欠けた部分はないものの、中央がすこし剥けている。もう一つ、大きなトレーがあるが、あちらは、アルミ製で味気ない。漆塗りのほうにする。煎茶を入れて、皿の上に懐紙を準備する。梅大福を出す。六個入っている。迷つて、一皿に二つずつのせる。

鉄を熱し、打つて延ばし、折り返してまた打つ。日本刀を作るとき、この、折り返し鍛錬と呼ばれる行程が十五回ほど続く。そうして打ち延ばされ、磨き上げられた刀身に近づくと、木や、果物の断面のような模様が見える。打ち方や折り返し方によつてさまざまな層状の模

様が描き出される。

私は線と線の間隔が広めの刀にかじりつく。葉の広い木々に邪魔をされること無く、のびのびと太陽を受けて育った木の年輪を見ている心地になる。キャプションを読む。松皮肌、と心の中で繰り返す。じつと見ていると、刀の、たかだか四センチメートルほどの幅が、私の空間のすべてになる。私の目は、私は、うつくしい銀と白の層の間を横向きに歩いている。刃の方の層に飛び移る。こちらのほうが、やや広い。また歩く。

棟側の層に行こうとして、隣に人がいるのに気づいた。松皮肌をもつ刀から離れる。ほかの刀を見て歩きながら、あの刀のほうを幾度も見やる。また、別の人がいる。松皮肌の層のなかに入れる機会をうかがう。

窓口に置いている紫陽花が白っぽくなっていく。いや、二色になっている。これまで青い萼の傘にかくれていた、内側の萼が開いている。新しく開いた萼は真っ白だ。二日前に出勤したときは、まだこうはなっていなかった。鍵を開けて事務室に入る。水を取り替える。後から開いた白い萼は、もともと咲いていた青い萼よりも一回り以上小さく、数も多い。

萼の外側には二枚の葉が左右対称にのびている。葉は今日もつやつやしている。太い葉脈も隅々までのびている。前から咲いていた青色の萼は、まだまだ萎れる気配はないが、先日

から薄い赤紫がかった筋が出て来た。

濃くてあざやかな、葉の緑色と、ちよつと色あせてきた青色の萼と、新しく開いた白い萼を見比べる。見比べるつもりが無くても、白い萼を見るときに、同じ茎のなかの、他の色のことを考慮しないでいる事ができない。水道水から得た水分で開いたから、白いのかもしれない。水道水は酸性でもアルカリ性でもないのか？　そもそも、どのような条件が揃えば、白色になるのだろうか。

いつから咲いていたのか、主事に教えてもらわなくてはならない。主事も昨日は休みだったと思出す。木元さんなら見ているかもしれない。早く三時半になればいい。

なすびを描いた錨を見ている。展示室入り口のほうから、ざわめきが耳に届く。声がしたというより、人の気配がする。顔を上げると、四人組のおじさんがいる。全員同世代に見える。六十代ぐらいだろうか。備前の、映りが、などと、ひそひそ楽しげに話している。敬語まじりだが、ずいぶん砕けた話し方だ。職場か、刀剣愛好会か何かで知り合ったグループだろうか。そのうち、一人の歩みが遅れ、黙って輪から外れる。カメラを取り出す。カメラには大きなレンズがついている。

そうだ。ここは撮影可能だった。私がお気に入りに入れているブログにそう書いてあった。

それに、撮影していただいてかまいません、との記載が入り口にあった。私のかばんにもデジタルカメラを入れてきた。

おじさんはレンズをガラスにくっつけんばかりに近寄っている。脚を肩幅に広げ、中腰になり、しつかりかまえている。体がぶれることはない。

おじさんたちが松皮肌の刀の前を過ぎたあとで、私もカメラを取り出す。私はあのおじさんのように体をぶらすことなくカメラをかまえることはできない。どんなに静止しているつもりでも、指や肘が細かく揺れているのを感じる。展示ガラスの前の出っ張りにカメラを置いて、両手で固定する。銀の層の筋をとらえる。写す。写した一枚を確認してみるが、この目で見たものと全く違う、魅力に欠ける地鉄がそこにある。私はカメラをしまう。

会議室の扉を最大限押し開く。ゴム製の黒い三角形を扉と床の間に差し込む。反対側を向く。壁を固定している留め金を二カ所外す。いつもは壁になっている部分が、部屋の内側に向かって折れ曲がる。百八十度回って、びたりと壁にはりつく。

入り口が広がったところで、選果場のかごが台車で運び込まれる。選果場のかごは便利だ。取っ手を内側に倒しておけば、同じ形のかごをいくつも重ねることができる。かごに入っているのは、梨や柿ではなく、あちこちの公民館で作られた作品だ。木元さんと、小学校の先

生のような人が、どこに何を展示するかを指示してくる。新聞広告で作られ、柿渋色に塗られた花かごが出てくる。畳のふちで作った手提げかばんが出てくる。キリギリスやコオロギを象った竹細工が出てくる。

小学校の先生のような人が、白くほつれた和紙の筋が入った、深緑の大きな用紙を壁に貼りつける。その近くの机には、絵と、手書きのキャプションが重ねられている。リストもある。手伝える雰囲気ではない。木元さんが先生に声をかけたが、私が入りますので、お気遣いなく！と明るく返される。私は、バットばつ丸柄の帽子をかぶった人形を、専用の椅子に座らせようとすする。人型のぬいぐるみで、主に靴下で作られているらしい。頭が重くて何度もずり落ちる。

松皮膚を見た。なんども引き返して見た。最後は、展示室に誰もいないからと長い間一人占めすることもできた。白銀の縞が、目の前にある美術館のガラスの扉や、その向こうの植木よりも大きなものに感じられる。縞じたいが大きいのではなく、私の周りに縞があるわけでもないのに。今、この目にはあの刀が映っていないけれど、見ているときと似たような心地になっている。頭が冴えている。頭が熱くて重い。

小さなトーマスボールや、木彫りの箱が並んだ机の続きに絵が並ぶ。小学校の先生が貼っていた絵だ。最初から下地の紙に目印となる線を入れて来たのかと思うほど、上下左右の線がきっちり揃っている。

紫陽花の話聞くために私がひきとめた木元さんも、そのまま絵を見ている。こうき、という名前を見つける。他に同じ音の名前の子はいないので、このこうきくんが、あのコーキくんなのだろう。コーキくんの漢字はわからない。姓も名もひらがなで書いてある。キャプションを見ると、一年生から四年生までがこれらの絵を描いたらしい。全部で十五枚ある。「五、六年生は描かないですね」と、木元さんに話をふってみると、「だって、さっきの箱やち作っとーなあもん。絵までやっとなら、大変」と、笑われる。

一年生と二年生が課題として与えられたモデルは、川の上流にある神社の御神木だった。木肌の変化はもちろん、からみついた蔦や、うろからのびる羊歯の葉や、根元に生える苔まで描いている子がいて、すごい、と声が出る。その隣にコーキくんの絵がある。コーキくんは木にはあまり興味が無いらしい。コーキくんの木は、一面同じ茶色で塗られている。ただ、木に提げられた白い紙の飾りはきちんと折れ目と切れ込みがわかるように影をつけて描いている。三年生と四年生は、合鴨の絵を描いている。この地区に、合鴨を使って、たんぼの害虫や雑草の除去をしている農家がある、と聞いたことがある。

あの女の子は、コーキくと同じ年ぐらいだろうか。

「こんなときに何なのですか」

木元さんが、私の声にひよいと顔を向ける。

「ちよっと前ですけど、コーキくんにうるさいって注意してた子、コーキくんといつも仲が良くないかんじですか？ あれから、コーキくと、あの子が一緒にいるのを見たこと無いんですけど、コーキくん大丈夫ですか」

「んー、まあ大丈夫だと思うけどねえ。コーキは小ちゃいことにこだわるタイプではあるけど、けっこう大人だし。」

あの子とコーキん家は、親戚同士なんだわ。普段は喧嘩するとか無いけど、ちよっと最近、お姉さんぶりたい時期に入っとってねえ。なまじ知つとる仲だけん、ついああやって嘸みつくようなこと言いなあに。まあ、注意して見とるけん」

「そうなんですか」三年生の絵の中に、コーキくと同じ名字で、女性につけそうな名前の子がいる。

「あの、鴨が二羽いる絵の子ですか？」

「んー？ ああ。違う。コーキを注意したのはこっちの」

「みたまちゃん、ですか」

「はずれ。ビジュ―」

意外な音に、一瞬黙る。

「近ごろの子どもの名前、読めんがー。」

私、学童保育用に子どもたちの名前とふりがな入ったリストもらってーけど、ほんっとに読み方分からないの多いよー。うちの子には、ばあちゃんが読めないような名前付けんでって言つとるとこだに」

そう、「たしか、ビジュ―って、フランス語ですよ。宝石って意味の」

「よー知つとおねえ。あすこのお母さん、フランスに留学しとつたらしいで」

「そうなんですネー。ビジュ―ちゃん、いつもおしやれな編み込みしてますけど、お母さんがやっけてらっしゃるんですかね」

「そーかもしれんね」

「なんか、前にテレビで、最近の子どもの名前並べて、なんて読むでしょう、みたいなクイズをしてたんですけど、ほとんど読めなかったんですよ。それを考えれば、ビジュ―ちゃんはまだ分かりやすいほうかも。音読みすればいいですし」

「でも、分からんでしょ」

「分からなかったですネ」

子どもたちが輪になっている。コーキくんはいない。ビジューちゃんはいる。ビジューちゃん今日の髪型は、後ろ髪を広範囲に編み込みをしながら、ポニーテールのようにひとつにまとめたものだ。

あと五分でお話会が始まる。いつも通り絵本の読み聞かせをするのかと思っていたら、今日は昔話を語るボランティアの方が来られると聞いた。まだボランティアの方は来ていない。時間のつなぎに、木元さんが手を動かしながら、歌を歌い始める。

こんなにたくさんさんの刀を見るのは初めてだった。自分が浮き足立っていることを自覚する。古刀は地鉄が青いと聞くが、ほんとうに青い。反りがきつく、きつさきの小さな室町時代の刀は、くもっていて、錆のようなものも浮いている。でも、たしかに青い。

平安時代に打たれた三日月宗近という太刀の写真を見たことがある。三日月宗近の刀身は、洞窟にたっぷり湛えられた水の底のような青さを放っていた。

古い時代に打たれた刀は青いのだと、あちこちの本に書いてある。それなのに、これまで、照明の角度かなにかの関係で、青く写っただけなのだろうと思っていた。でも、ここで、目の前で、私はたしかに室町時代の刀が青いと感じている。

紫陽花の色を決める要因は複数あるが、大きく外的な要因と内的な要因に分けることができる。外的な要因としてあげられるのは、土の pH 度や開花からの日数や、日照度といったものだ。色をより鮮やかにしたかったり、色を変えたりしたい場合は、これらの条件を整えれば良い。しかし、そうした条件をそろえても、思うような色が出ない場合がある。原因は内的な要因によるものかもしれない。内的な要因のひとつとして、紫陽花に含まれるアントシアニンの量があげられる。たとえば、アントシアニンが全く含まれていない紫陽花は白くなる。

しかし、アントシアニンが含まれている紫陽花でも白くなる場合がある。また、途中で白色に変化する紫陽花もある。

私のメモはここで終わっている。

館長のコラムに添えるカットを入れておいてと言われている。インターネットエキスプローラーを開くと、自動的にヤフーが開く。ロイヤリティフリー、と、八月、と、イラスト、と入れて検索をしてみる。可愛い絵がたくさん出てくる。可愛すぎる。改めて、館長のコラムを見る。同じページに写真素材が使われている。写真にすれば落ち着くか。私はまた検索

をする。良い写真がないので、先に公民館だよりに載せる記事にとりかかる。七夕行事の報告について、と打ち込む。

お手洗いから出ると、公民館の外にコーキくんがいる。

「コーキくん！」と私は呼びかける。呼びかけておいて、自分に戸惑う。コーキくんは、さつと走って行ってしまふ。公民館の建物の影にかくれるように、すぐにコーキくんの姿は見えなくなる。私も走ったものかどうか決めかねる。早歩きでそちらへ向かう。裏手を覗き込む。コーキくんの姿がない。ここにいないのであれば、道路に出たのか。十メートルほど先にある県道まで出て、左右を見渡す。コーキくんの姿はない。他の子どもの姿もない。電動三輪車に乗ったおじいさんが農協に向かっていく。分庁舎から住民課の、なんとかさんが出てくる。こちらに気づくことなく、公用車の置いてある駐車場へと歩いていく。

コーキくんは、公民館から分庁舎に抜ける小道に向かったのではないかと思いつく。分庁舎側から公民館に戻る。途中でコーキくとすれ違えばいいのと思う。すれ違わない。これ以上探しつづけて、電話番号をさぼるわけにはいかない。私はそのまま事務室に入る。

主事の友達の車が出て行った。今回は、玄関のシートより手前で車を停めてもらった。

竹を片付けると、玄関まわりが広くなったように感じる。竹からはがれた皮や、落ちてしまった葉を掃除してしまい、一息つく。事務室に戻ると、主事がいない。ついでに事務室の中も掃除したいと思うが、その前に休憩をしたい。椅子に座る。紫陽花を見る。紫陽花の茎には、茶色の斑点がついている。これは知っている。前からあつたはずだ。紫陽花の葉は重そうなのに、うまく茎だけでバランスをとっている。萼を支える白つぼい茎を見る。萼を見る。青い萼が、いつもと違っている。

青い萼の真ん中が四つに割れ、中からおしべのようなものがのびている。おしべ。紫陽花の花は、こんなふうには咲くのか。知らなかった。

青い萼の花は全て咲いている。おしべを隠していたつぼみは頂点から弧を描いて四筋に割れている。

白い萼はまだおしべが出ていない。この紫陽花を主事が持って来たのは、先々週の火曜日、そのときすでに、青い萼のほうは開いていた。白い萼のほうの花が咲くまで、半月以上はかかるだろう。

風呂に入っているときに、コラムのカットのことを思い出す。デジタルカメラに保存している写真を、まだパソコンに移動させていないことを思い出す。

髪を乾かしてから、デジタルカメラとパソコンを接続する。カメラから、全ての写真をパソコンにコピーする。カメラにあった写真は削除する。パソコンの画面で、写真を確認していく。

ピントの外れたもの、いらないので削除。自分の姿が写り込んだもの、刀身がよく見えないので削除。間違って連写したものを、一枚を残して削除。ムービー、撮るつもりが無かった。削除。連写ではないけれども、同じような構図の写真が続く。紫陽花の写真だ。

美術館に植わっていた、青い額紫陽花が写っている。青い萼の輪の中に、薄い青色の花があった。花が咲いて、おしべが伸びている。たくさんの花が写っている。事務室にいる紫陽花よりおしべが長い。そんなこと、撮影をしているときには気づかなかった。そういえば、角度が悪かったり、うまくピントが合わなかったりして、何度も撮ったのだと思いつく。ピントが合わなかったのは花が咲いていたせいかもしれない。おしべが多すぎて、焦点が合い難かったのだ。

職場の、私の机の横の、窓口の出っ張りに置いてある、青と白の紫陽花に感じた驚きが思い出される。

写真は私よりずっと目が良かったのだ。

虫かごを持ったコーキくんが公民館の前にいる。私は外に出た。あえて、ゆっくり歩く。コーキくんが私に気づいていることは、気づいている。コーキくんの周りには誰もいない。誰もいないことを確認している自分にちよつと嫌気がさす。

「暑いねえ。ちゃんと水飲みないよ。脱水になるけん」

とりあえず、口から出て来た言葉をそのまま音にする。コーキくんはそれに気の無い返事で応じる。何を言おうか考えていたはずなのに、出て来ない。でも、このまま黙っているわけにはいかない。

「こないだ、ごめんね」

「は、何が？」

「コーキさんが話しとる時に、ビジューさんが怒ったでしょう、あの時に何も言えんでごめんね。私も夢中で喋つとつたし、コーキさんだけが悪いわけじゃあ無かったにな」

「それかー。それは、いいし。そんなん、今さらだし。」

「だいたい、びーの言つてたことなんか、おれもう気にしとらんし」

今さら、という言葉がちくりと来る。やっぱり、あの場で口に出すべきだったのだ。

コーキくんは、縁石にはり付くように生えている苔を蹴った。苔の下にあった土や砂が出てくる。ダンゴムシやワラジムシがはい出してくる。土は湿っているから、片付けやすいだ

ろうと私は考える。

コーキくんが、公民館の中を覗き込んだ。

「七夕の、どこやっただ？」

「竹を持って来てくれた人の畑で燃やすだって」

「燃やすだか」コーキくんが笑う。「おれ、ばあちゃんの畑でいっつも燃やすの手伝つとる。

燃やすの得意」

「いいねえ。めっちゃくちや実用的だ」

「七夕のかざりも、竹も、きつとよく燃ええよ！ わかるに」

「乾燥しとるものしかないけんあ」

「よく乾かしとらん草だと燻るけん、いけんだよ」

コーキくんは、わざと話題を変えてくれたのだろう、と後で気づく。たしかにコーキくん

は大人だ。

刀を見るため、博物館へ行く。古墳から出て来た刀の鞘が金色に輝いている。刀身をもつとよく見たい。平安時代よりも古い時代の刀の地鉄はどんな模様になっているのだろうか。

松皮肌だと嬉しい。撮影しようと、カメラを取り出す。光を避け、刀身を撮ろうと、明度を

下げてみる。うまくいかない。博物館を出てからも、しばらく、目がいたい。あの展示ケースには妙に明るい照明がたくさんついていた。もっと光を落としてもいいのに。人の少ない隅のほうで、デジタルカメラで撮った画像を確認する。同じ刀の写真が三十枚近くある。刃文が直刃で、切刃づくりなのはわかる。でも、地鉄が写ったものはない。

コートールドの美術館を思い出す。あの美術館では、絵画一枚につき複数の照明が向けられており、一定時間ごとにライトの色が切り替わっていた。私の目的は、マネが描いたフォーリー・ベルジエールのバーを見ることだった。蛍光灯っぽい、白い光の時、絵は平面的になる。描かれた鏡の角度の奇妙さがよくわかる。それは、作者の意図に合致している。しばらくすると、黄色っぽい光になる。そのとき、陰影が生まれ、のっぺりとした印象のバーは、人の行き交うバーに変わる。ざわめきと、足音が混ざる。奇妙な角度の鏡は、絵の手前に描かれた酒を飲んだ結果、酔っぱらってしまった鑑賞者の目の錯覚を表したようにもとれる。そのまま酔っぱらいの気持ちで絵の前にいると、やがてまた、白い光が当てられる。私はバーではなく、マネの絵の前にいる。

私は展示室を出て、カフェに入る。カフェには、図録の見本が置いてある。図録に掲載されている古墳時代の刀は、私が撮影したものより、ずっと綺麗に写っている。地鉄は見えないが、私が見ていなかった柄の装飾が写っている。口元が可愛い獣頭の模様だった。

やはり、写真は目がいい。問題は、せっかく写真が覚えてくれていても、私の目が悪いままという場合だ。私は目が良くなりしたい。

受付に置いていた紫陽花の白色がくすんでいる。白い萼にふれると、落ちる。白い萼の茎が茶色になっている。白い萼の花は咲かないままだった。青い萼のほうは、まだ花が咲いている。落ちてしまった白い萼と、青い萼を比べると、青いほうがずっと厚い。白い萼は綺麗だったし、後から咲いたけれども、水道水しか飲んでいなかった。白いほうが好きだったから、残念だ。私は、コップの水を変える。青い萼がしおれるまでは、飾っておきたい。

来週木曜の放課後クラブは、木元さんがいない。代わりに、私が絵本の読み聞かせをすることになった。本を読むのは好きだが、絵本の読み聞かせをするのは初めてだ。私は木元さんから絵本の持ち方を教えてもらう。手のひらと、手首と、二の腕を総動員して本を支える。たった二回の練習で肩が痛くなる。「慣れだよ、慣れ」と、木元さんに言われる。

絵本を読む前に、木元さんのように手遊びをしたほうがいいですか？ 絵本を読んだら、どうしたらいいですか？ 私は木元さんから、絵本を読む前にする、定番の手遊びを教えてください。

「時間が余ったら、折り紙でもしときない。そういうの一式、置いといてあげーけん」

「ビーズとかもありますか？」

「やりたかったら持って来るけど」

これで、机の引き出しに入れたままのビーズが返せる、とほっとしていると、

「だけど、コーキは来んと思うで」と言われ、唐突だなと思う。

「ああ、コーキくん、絵本苦手ですよね」応えながら、改めて苦手そうだなと思う。トンボが主人公の作品ならいいかもしれないが、それでも「そんなん、トンボはせんし」「そげなん、知っとーし」とぶつぶつ言いそう。想像して笑いそうになる。私がそんなことを考えている間に、木元さんの話が続いている。

「……他の子もおるだけ、コーキばかり気にしとつても疲れえよ。ほどほどにしときない。

今日はビジュもおらんし、氣い張らんでいいけん」

「こしばらく、ビジュちゃん来てないですね」

「あすこん家、今日か明日あたり、妹が生まれるに」

だからか。「おめでたいですねえ！ ビジュちゃん、お姉さんになりますね」

木元さんが別れ際に「折り紙セット、いつもの部屋の使えん掃除機の近くに隠してああけん、勝手に使って」と言う。ビーズは、また別の機会に返そう。

夏至はとうに過ぎたが、まだ陽が落ちていない。午後六時は夕方というより、昼間に近い。明るい中を帰路につく。信号待ちをしながら、横断歩道の青信号が点滅するのを見る。その点滅のリズムに合わせて、ビジューさんが、お姉さん。ビジューさん。と、言葉が頭のなかで連なっていく。

コーキくとビジューさんのところの親戚関係はどのような雰囲気なのだろう。私の場合、いとこ同士でもほとんど兄弟のような関係だったから、親戚の中で子どもが生まれると、半分以上、自分自身の妹や弟のような気持ちで接した。自分より年齢が下のいとこが生まれるたび、姉になった気がした。コーキくんもお兄さんになるのか。コーキさんになるのか。

もしかして、コーキさんは、私が「コーキくん」と呼ぶのが、子どもっぽくて嫌だったのかもしれない。

私はそう思いつく。私が彼に謝罪しないといけないのは、そちらのことだったのかもしれない。

私は、コーキさんと話したくなる。また、「今さら」と言われるかもしれない。私はコーキさんと話す勇気がなくなってくる。

コンビニに立ち寄って、アイスを買う。車のなかで食べながら、主事が買ってくる大福が

欲しいと思う。そろそろ、マスカットの大福が出るころだ。マスカットの大福は、求肥も白あんも薄めで、中に入っているマスカットの薄緑色が透けて見えるほどだ。コーキさんに、コーキさんが本当に嫌だったことについてきちんと謝ることができたら、マスカット大福を一人で買いに行く、と決める。

目が覚める。部屋の電気がついている。エアコンをかけっぱなしにしていたせいで、布団の表面も、カーペットも、ひんやりとしている。カーテンを開けると、外は暗くなっていた。何時だろうか。

今日は、読み聞かせをした。私が名前を覚えていない子どもたちにかこまれて、絵本を読んだ。みんな、それなりに静かにして聞いてくれたのだが、木元さんや、ボランティアの人のように、話に引きつけることはできなかった。そわそわと時間が経つのを待っている子もいた。私も、読み終わったときに最初に感じたのは、肩の荷がひとつ降りたということだった。まだ時間があったので、折り紙をしようかと声をかけると、喜んで「これ、作って」と言いながら本を開いて持って来る子がいた。かなりレベルが高かったので、もっと簡単なものでお願いしたら、カエルやチューリップで我慢してくれた。木元さんはいつもこんなことをしているのか。

時計を見ると、夜の十一時だった。腹は空いていない。眠くもない。

机の上に、いつか美術館で買った図録が置きっぱなしになっている。開くと、たまたま、鏝にトンボをあしらった作品が目飛び込んでくる。羽の筋一本いっぽんまで表現されている。鏝が赤銅でできているのもいい。茜雲を背景に飛んでいるようだ。トンボは勝虫とも呼ばれる。まっすぐ飛ぶところから、武具の模様として好まれた、とどこかで読んだ。

作者名がカタカナで、驚く。南アフリカ、とあるので、南アフリカ出身なのだろう。

鏝に描かれたトンボは、日本に生息しているトンボなのだろうか。それとも、南アフリカにいるトンボなのだろうか。南アフリカにはどんなトンボがいるのだろうか。コーキさんが読んでいた図鑑になら、載っているかもしれない。あの図鑑は県立図書館から借りていたはずだ。

私はだんだんお腹が空いてくる。冷蔵庫を開ける。茄子とタマネギが入っている。レトルトのホワイトソースがある。冷凍庫に食パンが一枚残っている。台所で、グラタンを作る用意が始まる。

